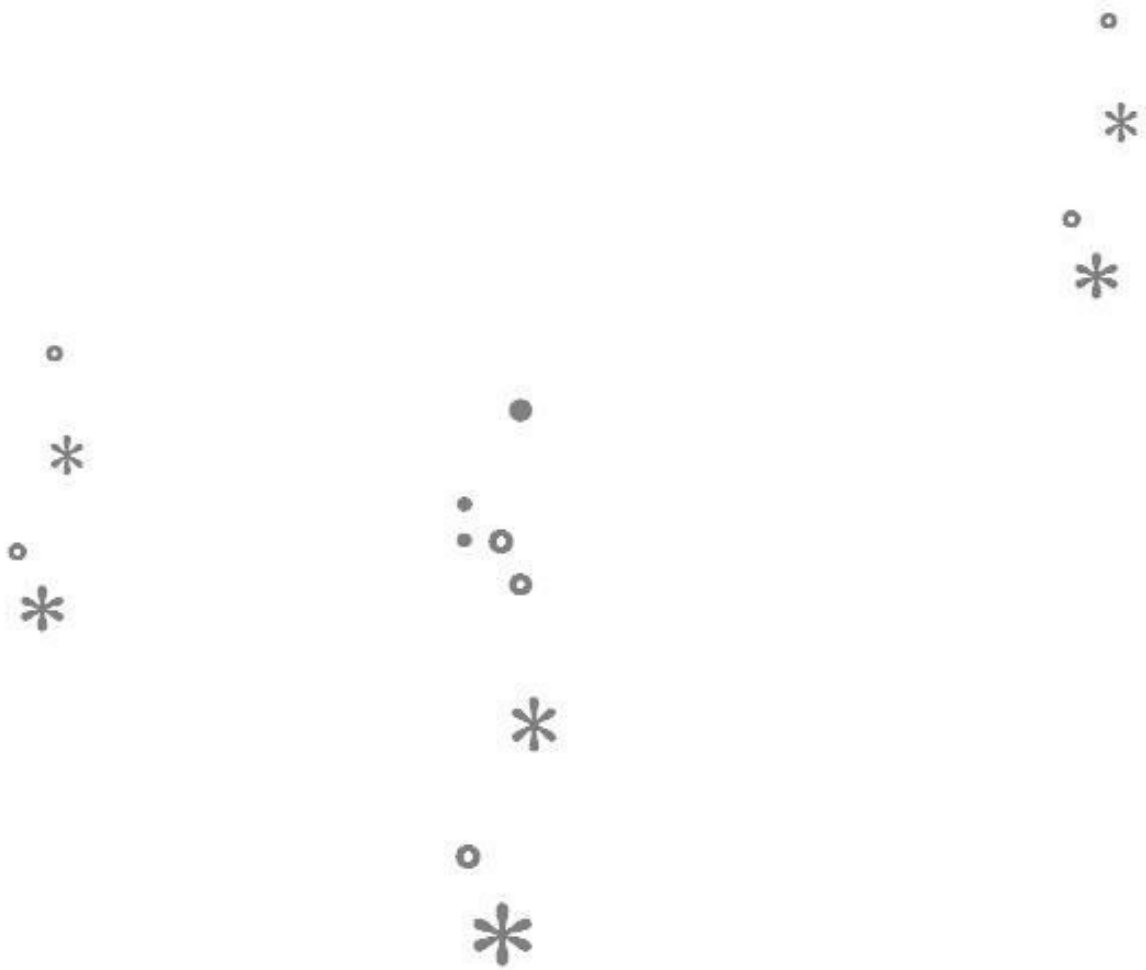


雪待ち

見上げる空



misato akira

風も弱く、ぽかぽかした小春日和だったので、千春は屋上でお昼ご飯を食べることにした。新校舎の階段をずんずん昇り、屋上へ続くドアを開けると、空はきれいに晴れていた。千春は階段の南側に寄りかかって座り、朝注文したクリームパンとコーヒー牛乳を開ける。太陽が優しく暖かく体を包んでくれている。

ゆっくりとパンをかじり、ときどきコーヒー牛乳のストローを口につける。誰もいない屋上は、空を独占しているようで気持ちが良かった。パンがなくなると、千春はコーヒー牛乳をずっと最後まで飲み干した。千春は甘いものが好きだ。ポケットからキャンディを一つ取り出す。封を開け、口に放り込む。りんご味が口の中いっぱい広がる。

「のどかだねえ」

千春はつぶやいた。のどかなものか、千春は高校三年だ。進学クラスなので受験前である。教室にいる同級生はピリピリしていて、休み時間も参考書を手放さない。誰もが敵。極端に言えばそんな感じ。千春は教室から逃げてきたのだ。その千春だって手には単語帳を持っている。英語の成績は悪くないが、どうしても苦手意識が抜けないので半分お守りなのだけれど。ぱらぱらと数枚捲り、閉じる。少し、昼寝をすることにした。寝ることだって大事なのだ、そう言い聞かせながら。目蓋を閉じると、ずっと意識は落ちた。

「あら、岡本さん」

千春は声で目を覚ました。覗き込む顔がある。生物の夏美先生。ばさりとした白衣をまとい、手には缶コーヒー。

「もう五限目始まってわよ？」

腕時計を見ながら夏美先生は言う。千春はドキッとして一瞬焦ったが、五限が体育であることを思い出し、息を深く吐き出した。どうせ何人かはサボって教室で受験勉強をしている。それと大差ないと思った。

「岩崎先生はなんでここに？」

千春が訊くと、夏美先生はくすくすと笑った。

「プランターに水遣りに来たの」

夏美先生が指差した先には確かにプランターが並んでいた。いくつか緑が見えるものもある。けれど、夏美先生は缶コーヒーを開けて千春の横に座り込んだ。

「いい天気ね」

「岩崎先生、もしかしてマリッジブルーとか？」

千春が茶化す。夏美先生はこの学校の国語教師である古川秋仁との結婚を控えている。

「岡本さん、好きな花とか、ある？」

「え？ えっと、ひまわり、かな」

「そっか、ひまわりか。私も一緒。ひまわり」

夏美先生は缶コーヒーを唇に当て、遠くを見ている。その顔があまりに奇麗なので、同性なが

ら千春はどきどきしてしまう。

「ブーケがさ、古川先生は百合を使って欲しいそうなのよね」

「定番じゃないですか。似合うと思いますよ？」

「小さいのでいいからひまわり使いたいになぁ」

千春には夏美先生が駄々をこねる子供のように見えた。くすりと笑う。幸せな悩みだな、と思った。

「ねえ、岡本さん」

不意に夏美先生が声をかけて千春の顔をじっと見る。真顔だ。

「私たち、すごく気が合うと思わない？」

千春が「え？ え？」と戸惑っていると、夏美先生は優しい声で「目を閉じて」と言った。千春は従う。唇に何かやわらかいものが触れる。やわらかくて暖かい。かすかにコーヒーの香り。そしてそれはすぐに離れた。夏美先生が立ち上がった気配があった。

「今のは二人の秘密ね。五限サボってることも秘密にしておいてあげるから」

夏美先生はいたずらっぽく笑い、ジョウロに水を溜め始める。

「あと十分で五限終わるから、そろそろ戻ったほうがいいんじゃない？」

背を向けたまま夏美先生は言う。ジョウロでプランターに水を遣る。

千春は何も言わず、逃げるように階段を駆け下りる。

妖精、梶原祐希の朝は早い。まだ星が残り、月が明るさを保っているうちに目を覚ます。梶原祐希の家はビルの上で、屋根がない。つまり屋上。太陽の光を全て浴びることができる。雨の日はどうしているのかと言うと、そのまま雨に打たれている。問題はない。だって梶原祐希は妖精だから。

梶原祐希は人間に憧れている。人間になりたいとさえ思っている。だから「梶原祐希」という名前を名乗る。自分で勝手に命名した。

梶原祐希が人間に憧れ人間に近づいてゆくほど、梶原祐希から妖精としての力が失われてゆく。そんなこと梶原祐希自身も知っているのだが、もう、本当に人間になってしまうつもりなのだろう。梶原祐希となってから、空を飛ぶことはできなくなった。もう、二本の足で歩かなければならない。ほかの妖精の声も聞き取りづらくなってきている。ほかの妖精の姿を見ることもなかなか困難になってきはじめている。それでも、梶原祐希は梶原祐希という名を名乗り、人間にどんどん近づいてゆく。最近では太陽で梶原祐希の影ができるようになった。姿を消すことはもうできない。

けれど梶原祐希自身はきっとそれでいいのだろう。

食パンの袋を取り出す。中から一枚の食パンを取り出し、拾ってきたオーブントースターを開いて中に入れる。オーブントースターは電気が通っていないので、当然パンが焼けるわけがない。梶原祐希は人間の真似事をする。朝のお母さんはオーブントースターに食パンを二枚入れ、数分後に取り出し、バターを塗って子供と一緒に食べる。マグカップに入ったコーンスープと共に。梶原祐希はそんな風景に憧れている。だからオーブントースターを拾ってきたし、電気が通ってなくても中に食パンを入れて、数分待つ。食パンは、スーパー裏の廃棄処分の食品が入った箱から拾ってきている。だから、きっと、賞味期限切れ。だけれども、梶原祐希は気にしない。

焼けた（つमりの）食パンを取り出し、バターがないので空を見る。月を見る。見ていると月の消えそうな光から雫が垂れる。それはまるで蜜。食パンで受ける。梶原祐希は拾ってきたスプーンで月の蜜を食パンいっぱい広げる。そして齧る。切ない寂しい味が口いっぱい広がる。梶原祐希は涙を流す。中途半端な梶原祐希自身を嘆く。早く人間になりたいと願う。もう妖精に戻れそうにないことを憂う。涙を流しながら、梶原祐希は食パンを食べきってしまう。月の蜜は、けれどとてもとても甘いのだ。

悪魔の絵本

千奈美が絵本を開くと、手のひらサイズの悪魔が現れた。

「望みはなんだ」

小さいくせにひどく偉そうに言うので千奈美はカチンときた。今日の千奈美は機嫌が悪いのだ。千奈美が睨みつけると悪魔は黙った。媚を売るように上目遣いで千奈美を見上げる。

「アンタが何をできるって言うのよ」

物置部屋で探し物をしていた。昔読んだ絵本を見つけたくて。母親とけんかして、千奈美自身に非があるとわかっていて、母親に甘えたくて、でもそれは気恥ずかしくて、せめて小さい頃に読み聞かせてもらった絵本を読もうと思って、物置小屋で探していて見つけた、開いた、と思ったら悪魔が出てきたのだ。冗談じゃない。絵本はほこりをかぶっていて、記憶していたより二周りほど小さかった。でもその本だと確信を持って開いた。なのに悪魔が出てくるなんて。

「俺がキミの願いを叶えてやる。三つだ」

本の上で悪魔がふんぞり返る。母親ともうけんかしたくない、と口まで出かかってやめる。母親を殺すかもしれない。確かにそれでけんかをするのはもう二度とないだろう。

「お母さんにこの絵本、読み聞かせてもらいたい」

「そんなことで一つ使っていいのか。欲がないな、今夜にでも叶えてやろう」

悪魔は満足げに一人頷いた。

「さあ、あと二つだ」

「そうだな……」

千奈美は考える。お金のことや時間のことなど、俗っぽいことをいくつか考えて、やめる。口を開く。

「探し物がすぐ見つかる能力」

「ほう、それはいいな」

悪魔が小さな手をなにやら動かす。踊っているように見えないこともない。最後に千奈美のおでこに触れる。

「よし、これでキミは探し物で困ることはないだろう。あと一つ」

耳ではなく頭に直接伝わってくる声がある。

『魂を取ればあと50年誰とも会わなくて大丈夫。コイツが三つ目の願いを言えばあと50年は一人でも生きていられる』

悪魔の顔を見ると虚勢を張っているようにしか見えない。

「最後の願いは」

「最後の願いは？」

沈黙。

「悪魔、アンタが寂しくないこと」

悪魔は黙ったままだ。目を見開いている。あごをガクガクと揺らしたあと、言う。

「それで、そんなものでいいのか」

「うん」

千奈美は深く頷く。よし、と悪魔は言う。

「三つ叶えた。じゃあな」

ぼひゆりと姿が消える。千奈美は絵本を閉じる。物置部屋を後にする。

夜。

「お母さん、これ読んで」

母親は驚いた風で、けれど、にっこり笑っておいでおいでをした。懐かしいわねーこの本、なんて言いながら。

読み終わると母親は千奈美の髪を撫でた。ゆっくりと、優しく。千奈美は恥ずかしくなり、おやすみなさい、と告げて自分の部屋へ戻った。絵本を手に。ほんわりした気持ちのまま布団にもぐりこみ、声を出す。

「ねえ悪魔、いるんでしょ？ ありがとう」

千奈美にはカーテンに隠れた悪魔を感じられた。

「ありがとう。おやすみ」

そのまま千奈美は寝息をたてはじめる。悪魔は千奈美の本棚に滑りこみ、ちらりと千奈美をみて言いかける。けれど言わずにそのまま本に溶ける。千奈美の大好きな本に。いつでも千奈美に会えると、心弾ませた悪魔も眠った夜。

雪待ち見上げる空

著者：みさとあきら (cage)

表紙デザイン：むーん (c a g e)

c a g e : we must Control our AGgressive Emotions.

<http://maruta.be/cage>

Copyright (C) 2011 c a g e All Rights Reserved.

powered by ブクログのパブー (株式会社paperboy&co.)